

広報たのみ診療所

退任のあいさつ

朝日診療所 医師 **山並 寛明**

やまなみ ひろあき



朝日診療所医師の山並です。挨拶に不相応な文ですが、転換期に残す意味を想って記事を書いています。

私は9月をもって退任し、しばらくの間診療所は日替わりの非常勤医による外来診療のみの体制となります。他の医療機関から遠い地理的な条件も鑑みると、人口3000人台に対して医師1人の配置、また休日中地域に医師が不在となることも救急や看取りなどの体制に問題を投げかけ、只見町はいま医療面において不公正な境遇に置かれると言って過言にはなりません。私も奥会津の風土と人が大好きなので、とても残念です。

私がこう話すのは、デモ活動をあおりたいわけではなく、ただ町民に今の状況を認知してもらいたいためです。実のところ、住民自身の上げた声に応える形でない支援には責任が伴いません。そのような「支援」は逆効果な場合すら時にあります。問題の所有「権」は責任を負わないどこかではなく、実際に困っている人、問題意識を感じている人にあると考えるべきです。

しかし一方で、一般に人口が1000人いたとき、診療所のような医療機関を訪れるのは約1割とされています。つまり、詭弁ですが診療所の体制は「町の少数者の問題」と言っても字面上間違いではないのです。そこで私は、町の医療に関わる人たちが1チームを作り、スポークスマン(代言人)として今ある課題を整理し発言する構想を提案します。

具体的には、診療所職員、介護施設の職員、救急隊員などが町の医療に関わる職種です。彼らをすべてつなぐハブになれる常駐医師は残念ながらなくなります。職種ごと町の医療を部分的にしか見られないため、町全体の課題を捉えるには各視点を持ち寄ることが必要です。人同士のつながりが強い只見町ならそれができると信じています。町の福祉については社協を中心とした「協議体」(愛称: 楽々しゃべっぺはなまる広場) という団体が既にあり、心配していません。

最後に、応援の先生方をご紹介します。まずは福島医大から、以前から来ていただいている菅家智史先生、そして、濱口杉大教授を筆頭に総合内科の先生です。そのほか南会津病院から週1で佐竹秀一先生、老健・特養の応援に宮下病院から佐竹賢仰先生です。

「ネイチャーポジティブ」はだれが、どんな取り組みをするの?

「ネイチャーポジティブ」は、「2020年を基準として、2030年までに自然が損なわれるようなことを食い止め、回復させ、2050年までに完全な回復を達成し、自然と共生する社会を実現する」という世界的な社会目標です。

私たちの日々の生活や経済活動は、自然の恵みに支えられており、自然が損なわれることは、私たちの暮らしのリスクに直結する大きな問題です。こうしたリスクを防止するためには、従来の自然保護だけでなく、地球温暖化などの気候変動対策や資源の循環にも取り組む必要があります。そして、これらを**個人のみならず、企業などの経済界を含んで、地球に暮らす私たち全員が取り組んでいくことが重要**となっています。

ネイチャーポジティブに取り組むことは、国内で2030年に100兆円以上の経済効果も期待されるという試算もあります。自然を守り、回復させていくことは、**経済面でも私たちの暮らしを良くすることにつながっていくのです。**

それでは、具体的にどのような行動をしたらいいのでしょうか。個人レベルの行動では、まずは地域の自然や生き物を知ることから、そして、地域の自然保護活動への参加、環境に優しく資源が循環するような消費選択、自然環境への配慮を意識したライフスタイルの実践などが考えられます。また、生態系へ大きな影響力があり、その損失が経営リスクになる企業については、環境省が持続可能な経営の目指すにあたっての考え方がまとめた「生物多様性民間参画ガイドライン」を策定しており、これを参考に**取り組むことができます。みんなもできることから「ネイチャーポジティブ」をはじめませんか?**



「だいだらぽじー (DAIDARAPOSIE)」
環境省が作成したネイチャーポジティブの
イメージキャラクター。